

# 北海道ぽすと

永遠の課題として 地球を守ろう。自然に帰ろう

2011  
8

## 脱原発の道標 (みちしるべ) 原発廃止と自然エネルギー活用へのベクトル

特集・2011北海道の社会資本整備

災害に強いまちづくり対策を重要課題として

北海道建設部  
武田準一郎 部長

2011年「地域のインフラ政策」

旭川建設管理部・網走建設管理部・釧路建設管理部・帯広建設管理部

龍馬考

龍馬もびっくり大震災『その聞きかじり』

坂本龍馬と語る会  
長山久男

(身土不二) 石塚左玄が唱えた「一物全体食」と取り入れるアメリカ合衆国



### 阿妻一直の『札幌焼・盤溪窯』 生い立ちの記

独立時代↓(出会い)  
一直焼・盤溪窯(その7)

前回は、陶芸産地、個人名の陶芸家、私の作品について触れましたが、今回は私の作品での釉薬(ゆうやく)について述べさせてもらいます。

私が盤溪に移転したのには、二つの理由があります。一つは、生まれ育った土地、西区八軒で「八軒窯」を立ち上げ、長年に渡り制作活動を行って来ましたが、時代と共に近代化された家が建ち並び、気が付けば目の前にあった木々の姿も消え、都会化されてしまった風景の中では、私の作品作りは活かされない。と、感じ始めたことです。そして二つ目は、長年の夢であった薪窯(穴窯)を造ること

でした。

ご存じの方は少ないと思いますが、粘土を焼く窯には、薪窯、電気窯、ガス窯、灯油窯などがあり、現代は住宅環境問題などもあり、電気窯、ガス窯が多く使われています。

私の作品にも電気、ガス窯を使用していますが、修行時代に経験した薪窯の魅力が忘れられず、いつか薪窯の作品を造りたいと思いつけていました。

しかし、八軒で薪窯を焚くことは出来ない(煙害)為、薪窯に適した場所を探していたところ、札幌市中央区という都会にありながら、自然豊かな盤溪に築窯に適し土地を見つけ出す事が出来ました。それが現在の地、「札幌焼 盤溪窯」です。私は、薪窯の中でも、穴窯を

自然釉を得る為に使う技法のひとつとして使用しています。そして、窯に作品を積める際に、釉薬を掛けずに無釉のまま粘土の状態でも窯に積めます。薪窯は読んで字の如く薪が燃料となります。

その薪を、窯焚きの間焚き続けます。私の窯は、その時の作品にもよりますが、約七日間かけて焚き通します。薪は燃えた後灰となり、その七日間焚き通した間に灰が作品に付着します。

付着した灰は、上温と共に少しづつ溶けてゆき、その溶けた灰が、釉薬の役目を果たしてくれます。その釉薬状となった状態を「自然釉」と呼びます。

自然釉とは、あくまでも窯の中で、人の手を加えずに出る。上がる作品の名称でありません。

実際に、七日間かけて焼き上がるまで作者である私自身もどんな作品になるか想像できず、それが薪窯の魅力のひとつでもあります。

自然釉の中でも、仕上げり状態によって、ビードロ・窯変・焦げとかに名称が変わります。この穴窯の共通の焼き物の中には、皆さん御存じの伊賀焼・信楽焼・備前焼・丹波焼・越前焼などがあります。

今回は、私の十八番であります海鼠釉(なまこゆう)について触れたいと思います。

海鼠釉は、私の修行先であります「こぶ志陶苑」・「檜岡焼」のメインの釉薬のひとつでもあります。両窯から得た知識を基に私自身のオリジナルとして完成させ、今日に至っています。